

# 室町時代禁裏女房の基礎的研究

—後花園天皇の時代を中心に—

松 蘭 齊

はじめに

前稿<sup>①</sup>では、主として戦国時代、後土御門天皇から後奈良天皇までの禁裏（内裏）に所属する女房を復元してみたが、今回はその前代に当たる時期、つまり後土御門天皇の父に当たる後花園天皇の時代について同じ試みを行なってみようと思う。

この時期に関しては、以前、『看聞日記』の記主である貞成親王が当主である伏見宮家の女房について復元を試みたが、宮家自体、貞成の祖父崇光院の御所を引き継いでおり、組織面でも人的な側面でも内裏のそれと密接な関係があった。さらに後花園天皇自体、貞成の子彦仁が後小松院の養子として後嗣の絶えた後光厳院流の天皇家の跡を継いで即位したため、特に女房については密接な関係を持つことになったと考えられ、その面の検討が本稿の一つの目的である。

この時期は、内裏の女房たちにとって様々な問題に直面した時期だった。

新しく迎えられた天皇は、まだ一〇歳にすぎず、その世話や教育面を担ったのは言うまでもないが、それに対して後小松院の指示を受けるばかりでなく、実家の貞成親王や將軍義教からも様々に介入を受けることになった。この背景には、分裂した持明院統天皇家における崇光院流（伏見宮家）・後光厳院流の対立が絡まっており、さらに新たに室町殿となった義教の公武社会におけるイニシアチブの掌握という問題も関わっていた。これらの影響を一方的に受け止めるだけでなく、内裏女房としての伝統と自立性を守ることも彼女たちの大事な課題であったはずである。

義満以来、公武社会は政治・経済・文化さまざまな側面で密接な

ものとなっていたが、これは女房たちの世界にも及んでおり、女房たちがこれらの諸側面でもつ影響力もまた大きかったと考えられ、この時期やはり拡大しつつあった尼の世界をも含めて理解をする必要がある。内裏・院・宮家の女房たちと室町殿や管領・守護などの上層の武家に仕える女房たち、ある意味これをそのまま寺院の世界に置き換えた尼たちの世界は、京都という舞台の上でほとんど一体のものとして考える必要がある。

公武の接近は、それぞれの政治的な問題に関わらざるをえない状況を生み出す。嘉吉元（一四四二）年六月の嘉吉の変における義教の暗殺、その二年後に起きた禁闕の変も公武どちらにも連動した事件であり、後述するように女房たちにも大きな試練をもたらすことになった。また、内裏や院御所で頻繁に繰り返される女房と廷臣たちとの密通事件<sup>③</sup>も、当事者のみならず女房たちを監督すべき地位にある上級女房たちに課題を強いたのである。この問題に介入してくる室町殿自身が内裏や院の女房たちと様々に関係を持っていた。

このように当該期の女性たちの世界はまだまだ説明すべき問題が多いと思われる、かつ次の時代にクローズアップされる日野富子などの理解にも押さえておくべき問題であろうと思う。

以下、後花園天皇の内裏女房の復元を行うが、この時代、前半から半ばにかけての正長・永享・嘉吉・文安の頃（一二二八～四九）

については、女房に関する史料が（主に日記であるが）豊富であるが、後半、宝徳・享徳・康正・長祿・寛正（一四四九～六四）については史料が少なく、作業も不十分なものに終わっていることをあらかじめお断りしておく。

最初に、今回の作業の結果を概観できるように、前稿と同様、確認された女房たちの在任時期を一覧した表をまず提示しておこう。この表の順に以下説明する。

## 第一章 上臈

### 1 正親町実秀女

閑院流藤原氏の西園寺流の庶流にあたる正親町（裏辻）実秀の娘であり、次の史料①に見えるように永享四（一四三二）年以降、上臈として確認される。

①「抑裏辻大納言入道一両日逝去云々、室町殿御意不快、家領等被召放令牢籠、大略餓死歟、不便々々、息女上臈禁裏祇候退出云々」（『看聞日記』永享四・六・八、以下『看聞』と略して表記する）

この時薨去した彼女の父実秀は、足利義教の勘気に遭い、家領等

室町時代禁裏女房の基礎的研究 (松 蘭)

	上臈	典侍										内侍										侍		命婦他	
	藤原? (正親町(裏辻)実秀女)	藤原冬子(三条実女、後土御門天皇旧院上臈)	藤原綱子(大納言、広橋兼宣女)	藤原光子(権大納言、日野有光女)	藤原倭子(中山満親女)	秀女・広橋兼郷猶子	藤原頼子(めめ典侍↓、日野家秀女・広橋兼郷猶子)	藤原? (新典侍、日野家秀女)	藤原? (月輪家輔女、新典侍)	藤原継子(中御門宗継女)	藤原衡子(四条隆衡女)	藤原親子(甘露寺親長女)	菅原茂子(元勾当内侍、東坊城秀長女)	菅原茂子(勾当↓宰相典侍、東坊城秀長女)	菅原孝子(後小松院左衛門督↓中内侍↓勾当内侍、東坊城長頼女)	藤原藤子(新内侍↓藤内侍、高倉永藤女)	菅原? (左衛門督、東坊城益長女)	藤原? (右衛門督、称光天皇勾当内侍、藤原能子の姪)	藤原藤子(新内侍、藤内侍、高倉永盛女)	藤原春子(小内侍、四辻季保養女)	和気郷子↓大炊御門信子(伊予)	御乳人	賀茂? (今参、賀茂富久姉妹)		
正長1	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	?	○	×	6(7)	
永享1	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	?	○	×	6(7)	
永享2	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	?	○	×	6(7)	
永享3	?	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	?	○	×	6(8)	
永享4	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	?	○	×	7(8)	
永享5	○	×	○	○	○			任	×	×	×	×	○	○				右衛門	×	×	?	○	×	10(11)	
永享6	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	○	?	○	○	×	×	×	×	○	○	×	10(11)	
永享7	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	?	○	○	×	×	×	×	○	○	○	12(13)	
永享8	○	×	○	○	○	○	?	×	×	×	×	×	○	?	○	○	×	×	×	×	○	○	○	11(13)	
永享9	○	×	○	○	○	○	?	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	12(13)	
永享10	○	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	?	×	×	○	○	○	12(13)	
永享11	○	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	?	×	×	○	○	○	12(13)	
永享12	○	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	?	×	×	○	○	○	12(13)	
嘉吉1	○	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○	新	×	○	○	○	13	
嘉吉2	○	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	13	
嘉吉3	○	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	13	
文安1	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○	×	○	×	×	○	○	○	12	
文安2	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	?	×	○	×	○	○	○	11(12)	
文安3	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○	?	×	○	×	○	○	○	10(11)	
文安4	○	×	○	×	×	○	○	○	×	×	×	×	○	×	○	○	?	×	○	○	○	○	○	11(12)	
文安5	○	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	?	×	?	?	○	?	?	7(12)	
宝徳1	×	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	?	×	?	?	○	?	?	6(11)	
宝徳2	×	×	○	×	×	○	○	×	○				任	×	○	×	×	×	?	?	○	?	?	7(12)	
宝徳3	×	×	○	×	×	○	○	×	○	×	×	×	○	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	7(12)	
享徳1	×	×	○	×	×	○	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	?	×	?	?	○	?	?	6(11)	
享徳2	×	×	○	×	×	○	○	×	×	○	×	×	○	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	7(12)	
享徳3	×	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	6(11)	
康正1	×	○	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	山	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	7(12)
康正2	×	?	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	5(11)	
長祿1	×	?	○	×	×	○	?	×	×	×	×	×	×	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	4(11)	
長祿2	×	?	○	×	×	○	?	×	×	×	×	×	×	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	4(11)	
長祿3	×	?	○	×	×	○	?	×	×	×	×	×	×	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	4(11)	
寛正1	×	?	○	×	×	○	?	×	×	×	×	×	×	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	5(11)	
寛正2	×	?	○	×	×	○	?	×	×	×	×	×	×	×	○	×	?	×	?	?	○	?	?	5(11)	
寛正3	×	○	○	×	×	○	?	×	×	×	×	○	×	×	○	×	?	?	?	○	○	?	?	7(13)	
寛正4	×	○	○	×	×	○	?	×	×	×	×	?	×	×	○	×	?	?	?	○	○	?	?	7(13)	
寛正5	×	○	○	×	×	○	?	×	×	×	×	×	×	×	○	×	?	?	?	○	○	?	?	7(13)	
備考	文安五年五月二日死(三)徳	長祿三年九月四日死(四)九徳					後土御門天皇の御母						康正元年 〇月〇日(母・九)	徳		文正元年 四月九日(母・九)	文安元年 七月二日(七)			後土御門天皇の御母					

注：○は在任中と確認もしくは推測される年。×は在任していないと考えられる年。？は在任していた可能性がある年。

を没収され困窮のうちに亡くなったという。父の死により内裏を退出した上臈局は、その後、文安五（一四四八）年に三二歳<sup>③</sup>で亡くなるまで出仕を続けている。

亡くなった年齢から逆算すると、この永享四年には一六歳で、永二六（一四一九）年生まれの後花園天皇より二歳ほど年上である。彼女の姉と思われる女性が按察局として称光天皇に仕えており、天皇との間に姫宮を儲け、その崩御後、素服を賜っていることからすると（『薩戒記』正長元・七・二三）、その姉の縁で上臈として出仕したものと推測される。

出仕の時期であるが、後土御門天皇の代に、後述する後花園院の上臈が院の崩後に内裏に出仕することが問題になった際に（前稿）、先例として称光天皇の上臈がその崩御の後に後花園天皇に出仕したことが引勘されており（『親長卿記』文明三・四・七）、すでに称光天皇の代に上臈として召されていたようである。恐らく称光天皇の代の上臈<sup>④</sup>で、洞院満季の猶子として入ったという女性がそれにあたると考えられる（『兼宣公記』応永三三・七・二二）。年齢も一〇歳くらいと推測され、新任の上臈としておかしくはない。

この時には、洞院家の猶子として入内するかどうかで議論があったようである。後に後土御門天皇の上臈として正親町持季（実秀子）の娘が洞院公数の猶子として入内しているが、「応永度故上臈局不<sup>レ</sup>

及<sup>二</sup>猶子<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>参由有<sup>二</sup>其沙汰<sup>一</sup>間、祖父入道殿堅被<sup>レ</sup>申<sup>三</sup>所存<sup>二</sup>者也、是雖<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>洞院一流<sup>一</sup>、三家外不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>然故也」と見えるように（『綱光公記』寛正五・六・二六）、称光天皇の上臈として実秀娘が出仕する際、一旦は猶子にせずともよいという判断が下ったようであるが、記主広橋綱光の「祖父入道殿」つまり兼宣が意見を言い、洞院満季の猶子として出仕することになったようである。ここでは「洞院一流」であっても「三家」でなければ出仕は叶わないという先例が存在していたことが知られるが、「三家」がどの家を指すのか、もう一つ不明であるものの、洞院家の庶流正親町家は資格がないとみなされたことは確かであろう。

ただし、一度は猶子とせずに出仕できるという判断が下されていたように、恐らく正親町家側にも言い分があったようである。正親町家は、たしかに西園寺公経の子実雄から発する洞院家のさらに分家に当たり、実秀に至るまで大納言を極官とし、大臣にまでは達することのできない家格であった。しかし、家祖というべき実明（洞院公守子）は、後伏見天皇の乳父として「彼御所無<sup>二</sup>左右之仁也<sup>一</sup>」（『吉統記』乾元元・一一・二二）といわれ、持明院統天皇家の有力廷臣として活躍した人物であった。『尊卑分脈』によれば、数多くの女子を持ち、伏見・後伏見・花園三代の後宮や広義門院などの女院に入れて、崇光天皇の皇太子であった直仁親王など多くの皇子女を儲け、

その子公蔭の娘も光厳上皇の皇子を産んでいる。この一流は、持明院統天皇家の後宮に深く関わってきた家であつたがために、その伝統を主張し、閑院流の嫡流諸家に準じられることを望んだものと推測される。

後小松院の意向が強く働いた人事とも思えるが、永享五年一〇月に院が崩じた際に素服を賜った人数には入っていない(『看聞日記』他)。また、伏見宮家とはあまり親しい間柄ではなかったらしく、『看聞日記』を見ても、永享七年末に宮家が伏見より京都に転居するまで宮家との交流はほとんど確認できない。

### 3 藤原冬子

吉野芳恵氏<sup>⑥</sup>が詳細に論じられている三条実量(実尚)の娘冬子が、実秀女が亡くなった後に上臈の地位に就いたと考えられるが、残念ながら在任中に確認できる史料はほとんど見当たらない。上臈は、典侍や内侍たちと異なり、内裏内で対外的に関わる職務がほとんどないようで、男性の公家たちと公的に接する機会が少ないためか、彼らの日記に登場しにくい傾向があることによる。

恐らく享徳四(一四五五)年閏四月に伊勢に参宮した「内裏上臈御局」はこの冬子であろう(『師郷記』享徳四・閏四・一八)。長享三(一四八九)年に四九歳で亡くなっている(『実隆公記』長享三・九・

一二)、この時一五歳くらいであり、入内して間もない頃であろうか。今のところその次に確認できるのは、後花園天皇讓位直前の寛正三(一四六二)年八月に「御船事」に伴う酒宴を催した「上臈・典侍殿」、同五年に広橋綱光が参じて正親町持季の息女を新帝の上臈に迎える件を相談した「上臈局」などにすぎない。

前項で洞院家が上臈を出す家柄として存在していたことがわかるが、同じ閑院流の三条家も同様の家格であつたと考えられる。

例えば後小松天皇の代の上臈は、後小松退位後にその御所で「仙洞上臈」(『看聞』応永二五・五・一九など)とよばれ、女房たちの中心的な役割を果たしていた三条実冬の娘であつたと推測される<sup>⑦</sup>。実量はこの実冬の孫にあたるとする。

実冬の属する一流は、閑院流藤原氏三条流の嫡流で、代々大臣位まで昇りうる家柄な上に、実冬の姉妹蔵子(公忠女)は後小松の母であるから、実冬は外戚としても優遇され太政大臣にまで昇った人物である。この蔵子も後円融天皇の上臈<sup>⑧</sup>の地位にあり、後小松の生母として女院号を与えられ(通陽門院)、その影響下に姪を息子の後小松の後宮に送り込んだものと考えられる。冬子については、前稿で後土御門天皇代の旧院上臈として述べたのではここでは再論しない。

## 第二章 典侍

## (一) 藤原綱子(大納言典侍)

## 1 後花園天皇践祚以前

次の史料②に見えるように、後花園天皇践祚時に前代より渡された女房の一人である。

## ②「典侍

権大納言

一位入道女、先帝典侍

大納言

広橋一位入道女、同

内侍

勾当

先帝勾当、自院御在位内侍也、  
故菅宰相秀長卿女

新内侍

先帝御時内侍也、入  
道前宰相永藤卿女〔薩戒記〕正長元・七・二八

藤原綱子は、「広橋一位入道女」とあるように、義持期に伝奏を勤めた広橋兼宣の娘で、兼宣は応永三二(一四二五)年、六〇歳で大納言を辞し、その年の四月に准大臣を与えられその日に出家して永享元(一四二九)年に亡くなっている。

彼女が典侍となったのは、応永九(一四〇二)年の賀茂祭の女使の典侍に選ばれた頃であろうか(『吉田家日次記』応永九・四・二〇)。前年の賀茂祭の折にも選ばれていたが、穢の恐れがあるので辞退

し、当時八歳の中山満親の娘が参仕することになった(『吉田日次記』応永八・三・二〇)。兼宣の娘もこの年齢に近いとすれば、応永元(一三九四)年頃の生まれとなり、恐らく賀茂祭の典侍に選ばれた後、しばらくして入内し典侍として勤め始めたものと考えられる。彼女はその後、恐らく後花園天皇が譲位する寛正五(一四六四)年頃<sup>9</sup>まで六〇年の長い間にわたって典侍の職を勤めることになる。

内裏の女房の筆頭的な立場である大納言典侍にいつ就任したかは不明であるが、後小松天皇代の大納言典侍は、譲位後に仙洞で大納言典侍と呼ばれた甘露寺兼長の娘経子(『看聞』応永三一・五・六など)であった可能性が高いので、応永一九(一四一二)年、称光天皇即位時あたりで大納言典侍となったのではないだろうか。応永二一年四月一四日に足利義持が父義満の七回忌のために等持寺で催した法華八講に内裏から参じた女房三人の中に見える「大納言典侍局」は綱子であると考えられる。

精神的に不安定で病弱な称光天皇を守らなくてはならず、当初より苦労が多かったものと推測される<sup>10</sup>。天皇は応永二五年あたりから病気がちとなっており、酒乱の傾向も相まって、ますます問題行動をエスカレートさせていった感がある。

また当時、内裏・仙洞御所ともに女房・女官らが公家や武家たちと密通事件をしばしば起こしており、女房らの監督にも意を払わな



ければならなかったであろう。しかし、これらの事件のいくつかは、後述するように天皇の疑心暗鬼による冤罪であったものも少なくないようである。

正長二(一四二九)年七月、皇嗣のなかった称光天皇の崩御により、後小松院は、伏見宮貞成親王の皇子彦仁王を養子に迎え即位させた。新帝はわずか一〇歳であり、この皇位継承にあたっては当然南朝関係者の反発も想定されたのであり、<sup>①</sup>幼い天皇に近侍する女房の人選には慎重にならざるをえなかったはずである。綱子が、新帝の大納言典侍として再任されたのは、院の信頼が厚かったからであり、称光天皇時代の実績を認められたからというべきであろう。

## 2 後花園天皇践祚以後

後花園天皇の代に入って、しばらくは平穏な日々が続いたようであるが、やがて問題となったのは、専制君主の顔を露わにし始めた將軍義教への対応であったろう。義教は、よく知られているように、公家・武家・僧侶を問わず、厳しくかつ冷酷な対応で臨み、後小松院との関係も次第に悪化していたようである。義教は、院との駆け引きの中で、後花園の実家伏見宮家を抱き込もうとし、院・室町殿・宮家の間に微妙な緊張関係を生じさせていた。綱子にとって頼りになる老練な父兼宣は、すでに代始めの永享元(一四二九)年に亡く

なってしまうっており、弟の兼郷は権中納言で、永享四年には院の執権に就いていたが、まだ彼女と同じくらいの年齢(三〇代)で、院や義教を相手にするにはあまり頼りにならなかったであろう。永享五年一〇月に院が崩御すると、まだ若い天皇を立てながら、その後宮に何かと手を伸ばしてくる義教と対峙することになり、その苦勞は並々ならぬものがあつたのではないだろうか。

「万人恐怖」と恐れられた義教の勘気がいつこちらに向いてくるか、公家も武家も戦々恐々であつたわけであるが、永享八年一〇月、ついに綱子の実家広橋家にも襲いかかってきた。伝奏を勤めていた弟の兼郷が「突鼻」された上、家領を没収されてしまったのである(この点については藤原頼子の項で詳しく述べる)。

ちょうどその頃、京都一条東洞院の伏見宮家の御所では、内裏伊与局が生んだ後花園の皇女(宮家で養育されていた)の魚味の儀式を行う予定であつたが、その陪膳の役を依頼されていた綱子は、実家に対する義教の意向に配慮して辞退を申し出てきた。その理由として「凡父母兼備人被撰事歟、此御所人達、幸ニ父母兼備之間、御陪膳可被候云々」と父母が健在な人を選ぶべきという条件が持ち出されているが、貞成は「内々儀ハ典侍殿日野就御勘氣」、公方御意如何之間斟酌云々」と記し、広橋家に対する義教の勘気が原因であることを十分承知していた(『看聞』永享八・一一・二二)。それでも

日は迫っており、適任者が見当たらなかったであろう、再度綱子に依頼し、義教の意向を確かめられたならば、という返事を何とか引き出し、次の史料③に見えるように、義教の意向は綱子でかまわないらしいという情報を提示して綱子の承諾を得た。

③「姫宮御魚味事、御陪膳典侍殿猶被<sub>レ</sub>故障申<sub>一</sub>、…御陪膳事ハともかくも可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>御意<sub>一</sub>云々、内々御趣典侍殿と被<sub>二</sub>思食<sub>一</sub>歟之由、内々有<sub>二</sub>告人<sub>一</sub>、仍寝殿之儀治定了、御陪膳事、典侍殿重令<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>公方<sub>一</sub>伺申之由示、仍被<sub>二</sub>領状申<sub>一</sub>、勾当所役ニ可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>参之由令<sub>レ</sub>申、伊与〔御母儀〕参て可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>拜見申<sub>一</sub>之由令<sub>レ</sub>申、面々被<sub>二</sub>領状<sub>一</sub>…」

（『看聞』永享八・二・二七）

この史料③に見えるように、「御趣典侍殿と被<sub>二</sub>思食<sub>一</sub>歟」という義教の意向を確かめて、「内々有<sub>二</sub>告人<sub>一</sub>」、つまりそれを宮家にもたらした人物は誰なのか気になるところであるが、恐らく貞成の室（南御方もしくは入江殿の尼西雲庵を介して、義教の室尹子（三条実雅の妹）あたりから伺ってもらったと考えられる。このような局面において、宮家の女性たちのネットワークが効果的に機能するのである。

内裏の外に存在する貴顕の女性たちの世界にも、内裏の女房たち

は目を配っていなければならなかったはずである。義教は、先例通り將軍家の正妻を代々出てきた日野家から妻室を入れているものの、彼女たちやその実家に対して極めて冷たい仕打ちを繰り返していた。義教の男子を生んだ裏松重子の実家である裏松義資のところ  
に祝いの挨拶に来た人々を、勘気を蒙って籠居中の人物に自分の許可なく慶賀に訪れたと、自身訪問したものばかりでなく使者を送った者まですべてリストアップし、所領や邸宅没収などの処分にした。その数は「惣而公家武家僧俗行向人六十余人」に及んだといいい、義資本人は命まで失うことになる。<sup>19</sup>

綱子も、また綱子と同様に実家が義教の勘気を蒙って悲惨な目にあった権大納言典侍藤原光子（次項参照）も典侍としての参仕は継続している。しかし、後小松院もすでになく、後花園天皇もまだ一〇代から二〇歳を過ぎた頃でまだ義教に対抗できる年齢ではない。義教に唯一意見を言える存在であった醍醐寺三寶院の満済も永享七年に亡くなってしまう。このような状況下で、義教の寵愛を一身に集め、実子はなかったものの義教が亡くなるまで第一夫人の座を保持していたのが三条家の尹子（当初今上臈と呼ばれ、後に上様と称された）であった。恐らく女性ではただ一人義教を諫めることができる存在であったと考えられる。恐らく綱子たちが典侍としての地位を守ることができたのは、内裏・將軍家、そして後花園



天皇の実家伏見宮家の女性たち、さらにその娘たちが入室していた  
尼門跡の間に張りめぐらされたネットワークの中にこの尹子も結ば  
れていたからではなかったであろうか。

綱子の長い在任期間の半ばには、嘉吉元(一四四一)年六月に起  
きた將軍義教の横死、いわゆる嘉吉の変が起き、同三年九月には、  
南朝の残党が日野有光と通じ、内裏を襲撃するという事件が起こっ  
た。この禁闕の変には、「大納言典侍取<sub>二</sub>劍璽<sub>一</sub>逃之処、凶徒奪取、  
無<sub>レ</sub>力被<sub>レ</sub>取て女中右往左往へ逃出、御乳人も小袖はかれて逃出、御  
所様御行衛も不<sub>レ</sub>知之由泣々申」(『看聞』嘉吉三・九・二三)とあるよ  
うに、綱子は三種の神器の内の剣と璽を持って退避しようとしたと  
ころ、押し入った兵士に奪われ、命からがら逃げるのがやつとであ  
り、天皇ともはぐれてしまったという。鎌倉時代、正応三(一二九〇)  
年三月、後花園の遠い先祖に当たる伏見天皇の殺害のために内裏(二  
条富小路殿)に押し入った武士浅原為頼の場合、内裏内部の様子に  
暗く、天皇の居所をなかなか見つけれずに失敗したが、今回は公  
家、それも娘を典侍(光子)として仕えさせている有力な廷臣が手  
引きしており、周到に計画して侵入したようで、天皇が女房姿で脱  
出しなかつたら本当に危うかつたようである(同九・二四)。

彼女の長い典侍生活の後半、もつとも意を払わなければならな  
かつたのは、内裏の命婦で台所別当を勤める伊与局が永享六年一〇

月に後花園天皇の皇女を、さらに八年後の嘉吉二年五月に皇子を出  
産したことであろう。後述するように、この女性には、医道を家業と  
し、この時期複数の「伊与局」を輩出している和氣氏の猶子として  
参仕したが、その本当の出自は、地下の樂人藤原孝長の子であると  
噂されていた。<sup>⑤</sup>当初この皇子たちは、まだ若い天皇がいずれ然るべ  
き家柄の女性との間に皇子をなせば、慣例通り仏門に入れられて終  
わる存在と考えられていたようである。そのため長く内裏ではなく  
伏見宮家に預けられて養育された。しかし、結局他に皇子が誕生せ  
ず、この伊与局が生んだ皇子が皇嗣として立ち、即位することになっ  
てしまうのである。この当初は目立たなかつた皇子とその母親を年  
月の経過の中でいかに遇し守っていくかが綱子の晩年の課題であつ  
たと推測される。この点についてはまた伊与の項で述べることにし  
よう。

綱子は、文安元(一四四四)年に後花園天皇の御乳母典侍に任じ  
られた。次の史料④に見えるように、それまでその地位にあつた権  
大納言典侍の光子の父有光が禁闕の変に与同し誅されてしまったた  
めに、彼女もさすがに内裏を「逐電」しなければならなかつたから  
である。この光子の場合、その祖父資教が後小松・称光二代にわたつ  
て御乳父を勤めていたのでその任にあつたのだが、綱子の場合には、  
そのキャリアと祖父仲光の姉妹で後光厳院妃となり後円融の生母

となった崇賢門院の「余芳」が評価されている。<sup>16)</sup>これは天皇が長年頼りにしてきた綱子に対し、その恩に報いた処遇と考えられよう。

④「密々以兵部卿有被尋下之旨、御乳母典侍事、日来権大納言典侍〔故入道儀同三司資教公孫女〕、而去年父一位入道〔有光〕謀反与同之時、依縁座逐電、其後未被定御乳母、如禁秘抄者、人数不可限一人歟、猶可有入数歟、一人モ不被置之条不可然歟、大納言典侍〔広橋故儀同三司兼宣公息女〕若可被定哉之趣也、此事日野故時光卿後円融院御乳父、以其由緒、彼親類為御乳母典侍、後小松院御在位之時、資教卿為御乳父、以其由、彼親類為御乳母典侍、称光院御宇、資教卿為御乳父、以□寄、権大納言典侍為御乳母、当今□宇、無御乳父之沙汰、然而権大納言典侍如元為御乳父、仍有此御沙汰也、當時大納言典侍、自御少年官仕之上、崇賢門院御余芳異于他歟、尤可然事也〔此趣申入了〕（後略）」

（『建内記』文安元・五・一二）

後花園天皇代の後半、『看聞日記』や『建内記』が終わってしまうと、女房たちの消息を伝える史料が激減してしまい、この時期の状況は

不明な点が多いが、比較的平穏な内裏での生活を送ったのではないかと思われる。彼女がいつ亡くなったかは不明である。

## （二）藤原光子（有子、権大納言典侍）

日野有光の娘で、綱子とともに称光天皇の典侍に選ばれて権大納言典侍の女房名を与えられ、そのまま後花園天皇の典侍となった女性である（史料②）。また、前述のように称光天皇の代より引き続き御乳母典侍の地位にあり（史料④）、大納言典侍と並ぶ権威をもっていたと推測される。

永享五年一〇月に後小松院が崩御した際に、素服を賜った女房の一人であり（『看聞』永享五・一〇・二八）、綱子は賜っていないところを見ると、より院に近い存在であったと推測される。父の有光は、次の史料⑤に見えるように後小松院の執権を勤めていた人物であった。

⑤「抑日野大納言有光卿（当時執権）、今日遂出家云々、亡母三十三廻也、仙洞御有増可御共申之由内々存企、雖然仙洞御素懷延引之間、存留之処、自公方可遂出家之由堅被仰、仍卅三廻彼是出家云々、執権折節無念事歟」

（『看聞』応永三二・三・三）

この日、三九歳で権大納言の日野有光が突然出家を遂げ、人々を驚かせることになった。年齢的にもまだ出家するような年齢ではなく、亡き母の三十三回忌という理由であつたからというのが、誰も信じていなかった。どうも後小松院が出家を予定していたので、後を追つて出家しようとしていたが、延期になつたので自分も留まつたところ、義持から出家せよと「堅く仰せられ」てしまい、出家せざるをえなくなつたというが、それも有力な廷臣を辞めさせるにはわかりにくい理由である。

この突然の出家にはもう少し事情があつたと見るべきであろう。この年の正月に彼の娘である権大納言典侍が流産をしたという噂が流れ(『看聞』応永三二・一二六)、有光が出家した翌月彼女の密通の噂が都を駆けめぐつた。

⑥「…頭左中弁宣光朝臣談曰、右中将実雅朝臣(三条大納言息)与<sub>二</sub>内女房権大納言典侍<sub>一</sub>(日野新一位入道息女、主上御寵也)有<sub>二</sub>蜜通之儀<sub>一</sub>、其気色已於<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>露顯〔後聞、此事頗虚<sub>(虚)</sub>命云々、不便事也〕、可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>罪科<sub>一</sub>之由、自<sub>レ</sub>内被<sub>レ</sub>申院、上皇再往雖<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>宥申<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>御承引之儀<sub>一</sub>、仍解官事可<sub>レ</sub>宣下<sub>二</sub>之由被<sub>レ</sub>仰下<sub>一</sub>者…」

(『薩戒記』応永三二・四・一)

光子が三条実雅と密通していると思ひこんだ天皇は、怒り心頭で父の後小松院に彼らを罪科に処するようにと訴えたらしい。院は再三宥めたが天皇は収まらず、ついに実雅は解官されることになつたというのである。

この事件は、この手の話が大好きな伏見宮貞成親王の耳にも入り、その日記に顛末を記している。

⑦「抑三条中将実雅朝臣内裏蒙<sub>二</sub>勅勘<sub>一</sub>籠居云々、御懺法散花役人也、装束用意之処被<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>、計会々々、其故者、去廿九日彼朝臣内裏へ被<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>一献<sub>一</sub>、而大納言典侍殿依<sub>二</sub>醉氣<sub>一</sub>早出、酸臥之所へ彼朝臣尋行云々、主上狼藉之由被<sub>レ</sub>仰、逆鱗忽有<sub>二</sub>勅勘<sub>一</sub>、聽此由仙洞へ被<sub>レ</sub>申被<sub>レ</sub>追籠、更無<sub>レ</sub>咎之由父大納言陳申之間、同罪之由被<sub>レ</sub>仰、然而室町殿被<sub>二</sub>執申<sub>一</sub>、互相ハ御免、実雅朝臣ハ籠居云々、不便々々」

(『看聞』応永三二・四・七)

貞成が聞いたところによると、内裏での宴席で酔いがまわり、その場から下がり「醉臥」していた「大納言典侍」(恐らく権大納言典侍の誤り)を実雅(当時一七歳)が訪れたと、天皇が耳にして腹を立

てたことから始まったようである。天皇は実雅を勅勘しただけでは収まらず、父の院に訴えて典侍をも「追籠」めてしまい、更に息子を弁護したその父三条公雅をも同罪にせよ、と院にねじ込んだことで事が大きくなり、結局のところ義持が仲介に入って、実雅の謹慎のみで済んだというものであった。

実雅は後に仙洞の女房と密通事件を起こしたりもしているので『看聞』永享二・五・一一、まったくの潔白とは言い難いが、『薩戒記』の記主中山定親も、後で聞いた話として「此事頗虚<sup>(8)</sup>命云々」と密通そのものには懐疑的であり、また貞成が記すように、酒席での戯れ事に対し、正月の彼女の流産などで神経過敏となっていた天皇（この時二五歳）の精神状態の方が問題であったようである。有光の娘に対する称光天皇の寵愛の深さは天皇の精神状態をますます不安定なものとした。その上、院の執権として権勢を振う有光に対する義持や公家たちの反発があったのかもしれない。院が有光を擁護した形跡が見えないのも彼の敵の多さを感じさせる。なお、この応永三二年に起きた三条実雅の事件と和氣保成がやはり称光天皇寵愛の女官と密通したという事件（『看聞』応永三二・六・二）について、坂本和久氏<sup>(3)</sup>は、この年の貞成の親王宣下の問題と関連付けているが、影響がないとは言いい切れないものの、ひとまず別な問題と考えておいた方がよいように思う。

永享二年、有光は、今度は義教の勘気を蒙り、他の公家らと同様に所領を没収されてしまった（『看聞』永享二・六・一二）。一旦は赦免されたようだが（『看聞』永享三・五・八）、「日野宗領〔代々〕管領之地也」であった能登国若山庄は返付されることなく、さらに院の崩御後の永享六年にはすべての所領没収という目にあい、隠居に追い込まれてしまった（『看聞』永享六・二・二八）。それでも光子は典侍の職務を続けていたが、義教が参内した際の宴席に祇候しないように圧力をかけられるようになり、典侍としての参仕が一時危ぶまれていたようである（『看聞』永享六・八・四）。しかし、永享八年、大納言典侍綱子の実家広橋家が没落するとともに、今度は隠居していた光子の兄弟資親が召し出され、広橋家の所領三ヶ所を拝領して廟堂に復帰することに（『看聞』永享八・一〇・二九）、彼女も典侍としての参仕を続けていたようである<sup>(17)</sup>。しかし、嘉吉三（一四四三）年、前述の禁闕の変で、有光・資親親子とともに処刑され、彼女も内裏を逐電して（史料<sup>(4)</sup>）、その後の消息は不明である。

### （三）その他の典侍たち

表2は、上記の二人及び次に述べる藤原僚子以外で当該期典侍として確認される女房たちを整理したものである。一応七人ほど確認

# 室町時代禁裏女房の基礎的研究（松 蘭）

表2 後花園天皇代の典侍

	藤原頼子（日野家秀（元秀光）女、 広橋兼郷猶子）	藤原？（日野家秀（元秀光）女）	その他
永享 5 年 （1433）	4,14「賀茂祭也、典侍広橋息女〔六歳） 渡」（『看聞』）「典侍頼子〔故権大納言 家秀卿女也）」（『嵯成』）「日野中納言沙 汰立之」（『師郷』）		
永享 7 年 （1435）		4,19「賀茂祭也、典侍日野故中納言秀光卿息 女〔十四歳）也」（『看聞』）	
永享 8 年 （1436）	4,25 賀茂祭「典侍日野中納言息女〔八 歳）」（『看聞』）		
永享 10 年 （1438）		2,10「権典侍・新典侍」（『看聞』）	
嘉吉元年 （1441）			4,19 賀茂祭「典侍ノ有子 右大弁宰相資親卿 沙汰立之」 ＊日野有光女（資親妹）「後花園院新典侍」 （『尊卑分脈』）
嘉吉 3 年 （1443）	4,24 賀茂祭「典侍広橋中納言女〔十五 歳）」（『看聞』）「兼郷卿息女」（『康富』） 10,16「めノ典侍・12,19「新典侍・めノ 典侍・12,21「新典侍・めノ典侍・12,22 「新典侍・めノ典侍」（以上『看聞』）	12,19「新典侍・めノ典侍」・12,21「新典侍・ めノ典侍」・12,22「新典侍・めノ典侍」（以上 『看聞』）	
文安元年 （1444）		1,3「後日伝聞、今日内裏女房達新佐局〔故中 納言秀光卿息女云々）、俄成狂気之間、女中騒 動云々、不可説々々」（『康富』）	
文安 4 年 （1447）	11,28「新典侍・〔広橋）めノ典侍」（『看 聞』）	11,28「新典侍・〔広橋）めノ典侍」（『看聞』）	3,14「新典侍〔故家輔卿女）」（『建内』） 4,24 賀茂祭「今年典侍中御門大納言宗繼卿息 女也、未被伺候禁中仁也、典侍〔藤原繼子） 宣旨、去月廿三日日付、今月十三日到來局」 （『康富』）
文安 5 年 （1448）	4,18 賀茂祭「典侍、広橋藏人兵衛佐綱 光之姉妹也」（『康富』）「典侍ノ子〔藏 人兵衛佐綱光沙汰進之）」（『師郷』）	9,29「禁裏新典侍殿〔故秀光卿息女）此間懷 妊、今夜於右兵衛督宿所密々着帶云々、頭右 大弁宿所事被仰之处、俄故障之由申之云々、 自武家大方殿執御沙汰云々」（『師郷』） 2,26「今日姫宮御誕生、御母儀新典侍殿〔故 秀光卿女也）、御産所頭右大弁宿所也」（同前）	
宝徳 2 年 （1450）			4,23「典侍ノ子〔中御門大納言被沙汰之進之）」 （『師郷』）
宝徳 3 年 （1451）			4,17「典侍ノ子 中御門大納言被沙汰立之」 （『師郷』）
享徳元年 （1452）			4,22 賀茂祭「典侍繼子〔中御門大納言息女、 彼卿被沙汰進之）」（『師郷』）
享徳 2 年 （1453）			4,22「賀茂祭、典子衡子〔按察使隆盛卿息女）」 （『師郷』）
享徳 3 年 （1454）	4,16 賀茂祭「典侍ノ、〔右大弁宰相沙 汰進之）」（『師郷』） ＊右大弁宰相＝広橋綱光		
康正元年 （1455）	4,22「賀茂祭不被行、典侍右大弁宰相 被沙汰立之間、御訪且雖被下行、其外 諸司等不被下之間、不被行者也」（『師 郷』）・間 4,28 賀茂祭「典侍〔頼子、広 橋右大弁相公綱光卿妹也）」（『康富』）		
康正 2 年 （1456）		5,30「今日於陣有贈官宣下事、故日野家秀卿 〔大納言職）ニ被贈内大臣、…息女抵候禁裏、 号新典侍殿、後御沙汰云々、当年廿五年云々」 （『師郷』）	
寛正 3 年 （1462）	2,6「典侍殿局」・5,6「典殿」・8,5「典 侍殿」10,16「典侍殿令伴内裏女房達給、 御経并二度観音堂令參詣給、為車云々、 雑色二人召進之」（以上『綱光』）		2,7「入夜参内、新典侍局臨幸故也、都護卿毎 事致其沙汰云々」・4,20 賀茂祭「典侍、按察 中納言沙汰立之、新典侍依月水事、別人沙汰 立云々」（以上『綱光』） ＊甘露寺親長（都護卿・按察中納言）女？
寛正 5 年 （1463）	7,14「典侍殿」（『綱光』）		

されるが、主な史料は賀茂祭の女使の典侍に選ばれた記事で、実際に内裏で日常的に勤務していたかは不明である。

その七人とは、中山満親の娘で、後花園天皇の時代の初期に典侍として見える藤原僚子、日野家秀（元秀光）の娘で広橋兼郷の猶子として出仕した藤原頼子、それに同じく日野家秀の娘で永享一〇年あたりから新典侍と呼ばれていた女性、文安四（一四四七）年から享徳二（一四五三）年にかけて賀茂祭の典侍として見える藤原継子（中御門宗継の娘）、それに藤原有光の娘と考えられる藤原有子、月輪家輔の娘、それに甘露寺親長の娘で、それぞれ一回ずつ賀茂祭の典侍としての記事が残されている。以下、比較的史料が残されている四人について述べておこう。

## 1 藤原僚子

まず、藤原僚子（中山満親女）については、『薩戒記』記主中山定親の妹で、その日記に「典侍当時三人、所謂綱子（従四位下、故兼宣卿女）・光子（正五位下、入道一位有光卿女）・僚子（従五位下、予妹）等也」（永享二・一二・二五）とあり、後花園天皇の典侍であったことは疑いない。また、すでに称光天皇の代にも賀茂祭の女使として参仕していることが知られる（『薩戒記』応永三二・四・二一）。しかし、その後も彼の日記には、賀茂祭の女使に選ばれた時しか彼女

のことが現われず、それは永享九年までは確認されるが、以後の消息は不明である。応永三二（一四二五）年に一〇歳であり（同前）、永享九（一四三七）年には二二歳となっているから、すでに典侍として御所内で勤仕していてもおかしくないはずであるが、当時の史料にはそれらしき女房は見えない。

## 2 藤原頼子

日野家秀の娘頼子は、永享五（一四三三）年四月一日に典侍に任じられ、一四日の賀茂祭に女使として参仕した。家秀は日野有光の弟で、元は量光と呼ばれ、応永二五年頃に秀光と改名、更に永享三年、権中納言の時に家秀と改めたが、翌年六月一日、「所労危急」によって急遽権大納言に昇進しその日に薨じた。三二歳の若さでこの昇進が可能であったのは、永享二年四月以来院の執権を勤め、後小松院の寵臣の一人であったからであろう。<sup>(19)</sup>この秀光には、日野家の嫡流が代々相伝してきた能登国若山庄が与えられていたが、男子がいなかったため、広橋兼郷の長子春龍丸（八歳）が猶子として秀光の遺跡を受け継ぐことになった（『看聞』永享四・六・二、六・四）。しかし不幸にもその年の九月一日に病死してしまい、一旦は保留となったが、兼郷自身が秀光の遺跡を相続して日野を名乗り、広橋家は次子の綱光に継がせるようにとの義教の命が下ったのである（同



前九・一一、一〇・一一)。

当時の史料では確認できないが、『尊卑分脈』の秀光女子の注に「為兼郷卿子」と見えるように、この兼郷が日野家の遺跡を継承した段階で残されていた娘たちの中には兼郷に引き取られた者がいたのであろう。頼子が最初に典侍として現れる永享五年四月一四日の賀茂祭の記事について、『看聞日記』では「典侍広橋息女〔六歳〕」、『薩戒記』では「典侍頼子〔故権大納言家秀卿女也〕」、『師郷記』では「日野中納言沙汰立之」とあるのは、兼郷がこの時点で日野を名乗っており、さらに家秀息女の頼子が広橋家の猶子として典侍に立ったがため、このように三様の表現となってしまったと推測されるのである。また、表2に見えるように、頼子が永享八年の賀茂祭では「日野中納言息女」とあり、それが嘉吉三年では「広橋中納言女」となっているのは、前述のように兼郷が、義教の勘気を蒙って相続した日野家ばかりでなく広橋家の家領まで没収されてしまい、<sup>(20)</sup>籠居せざるをえなくなったものの、その後も兼郷が日野を名乗り続けていたため、日野一門の中からクレームが出るようになり(『建内記』嘉吉元・一〇・九)、次第に元の広橋で呼ばれるようになっていたことが反映しているのであろう。

表2の頼子の項の文安四年に見えるように、この一九歳の頃、見習いの若い典侍に付けられる「めめ典侍」と呼ばれており、嘉吉三

年の項に見える「め、典侍」も頼子と考えられる。文安四年以後、一人前の女房名が与えられたと思われるが、今のところ確認できない。頼子は後花園天皇讓位後も引き続き後土御門天皇の典侍に任命され、大納言典侍の地位に就いた。<sup>(21)</sup>次の新典侍の項で触れるように、すでに後花園天皇の代に大納言典侍に就いていた可能性がある。

### 3 新典侍(日野秀光女)

日野家秀(元秀光)の娘はもう一人いて、やはり典侍として出仕していたようである。表2の藤原?(日野家秀(元秀光)女)の項で、彼女が初めて現れる永享七年のところを見るとわかるように、彼女は前記の頼子より年上であり、また、文安元年のところでもわかるように、頼子がまだ「め、典侍」とよばれている頃にすでに新典侍という一人前の女房名を称していた。不思議なのは、彼女は、管見に入った限りではあるが、史料では家秀の元の名秀光の娘と注記されることが多く、今のところ理由は不明であるが、単に家秀への改名が亡くなる直前に行われたため、人々に余り周知されていないというだけではないように思われる。

表2に見えるように、新典侍は文安五年に後花園天皇の皇女を産んでいる。この皇女は前述の『尊卑分脈』の秀光の子で「郷子」と注記がある女子の注に「真乗寺宮御母儀」として見える、尼門跡真

乗寺に入った皇女を指すのであろう(『本朝皇胤紹運録』には見えない)。  
『尊卑分脈』に記載された秀光女子は二人だけであり、一方には「比丘」「号平岡」と注記されるように尼となった女子であり、内裏女房は「後花園院大納言典侍」と注記された一人だけであるが、実際にはここで述べたように二人いたらしく、『尊卑分脈』の注はその二人の事績を合体してしまっているようである。もしこの「後花園院大納言典侍」の注記が正しいとすれば、おそらく前述の頼子がすでに後花園天皇の代に、綱子より大納言典侍の職を受け継いでいた可能性が考えられるが、今のところそれを示す史料は管見に入らない。

#### 4 藤原親子

甘露寺親長の娘で、『尊卑分脈』に「典侍 親子」として「後花園院御在位之時伺候、後通世」と注記がある。寛正三(一四六二)年の賀茂祭に父親長の「沙汰」で立つことになったが、当日は本人の「月水事」によって別人に変更された新典侍がこの親子と考えられる(『綱光公記』寛正三・二・七、四・二〇)。文明一八(一四八六)年に四三歳で亡くなった「親長卿嫡女」で「故院大納言比丘尼」はこの親子と考えられ(『実隆公記』文明一八・三・二八)、逆算すると賀茂祭の典侍に立ったのは一九歳の時となり、この少し前に典侍に参仕し

たと推測される。後花園天皇退位後、院の女房となって大納言局とよばれ、恐らく院の崩御(文明二年)によって出家したものと推測される。

### 第三章 内侍

この時期の勾当内侍については、前掲の吉野氏の論文で詳細に論じられているので、いくつか補足するのみで概略を示しておこう。

#### 1 菅原茂子(勾当↓宰相典侍)

東坊城(菅原)秀長の娘で、康正元(一四五五)年一〇月に七九歳で出家したという史料が残されているので(『師郷記』康正元・一〇・二〇)、逆算すると永和三(一三七七)年生まれである。後小松天皇の時代、<sup>(22)</sup> 応永三(一三九六)年にすでに新内侍として活動が見え(『荒暦』応永三・四・二三)、その後、いくつか記事が確認されるが、応永九年の吉田祭では、何かの手違いから参仕せずに父秀長の邸に下がってしまい、後小松天皇の勅勘を受けた(『吉田家日次記』応永九・一一・五)。その後、関連記事を見出せないが、恐らく後小松讓位とともに院の御所の女房となり、別当局と称したようである。<sup>(23)</sup>

応永二九(一四三二)年、茂子は仙洞の女房から、勾当内侍に抜擢される。

⑧「抑禁裏御惱事、典侍禪尼ニ遣書状之處、被返了、其故者、勾当職仙洞別当局〔菅宰相娘〕被補了、長階局ニ此間移住云々、於于今禁裏御事不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>申次<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>申、驚入也、典侍禪尼籠居以後、彼親類〔右衛門督局〕被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>勾当了<sub>一</sub>、但一兩年里ニ籠居、有<sub>二</sub>公事之時被<sub>レ</sub>召出<sub>一</sub>云々、別当局此職連々所望之由兼聞<sub>レ</sub>之、遂被<sub>レ</sub>補了、〔右衛門督局〕前勾当失<sub>二</sub>面目<sub>一</sub>、典侍禪尼老後恥辱尤不便也、故北山殿御時蒙寵愛<sub>二</sub>値榮幸<sub>一</sub>、暫時思出如<sub>レ</sub>夢、天上五衰被<sub>レ</sub>歎者哉」

(『看聞』 応永二九・六・一三)

『看聞日記』記主貞成が、称光天皇の病氣の見舞いを取り次いでもらうために、前勾当内侍の藤原能子(典侍禪尼)に書状を送ったところ、返されてきてしまった。その理由は、彼女の「親類」で勾当内侍に補されていた右衛門督局が急に更迭され、新たに仙洞別当局(茂子)が勾当内侍に任ぜられて長橋局に移住してきたため、もう内裏との取り次ぎは無理だというのである。右衛門督局は、ここ一、二年里に籠居しており、公事で所役がある場合にだけ召されて出仕していたらしいが、別当局は前々からこの地位を望んでおり、その辺りの事情につけてこんで手に入ってしまったらしい。茂子が勾

当内侍に補任された正確な日次は明らかではないが、四月二三日の賀茂祭に「仙洞別当局」が見えているので(『兼宣公記』)、それ以後、史料⑧の六月一三日までの間ということになる。

正長元(一四二八)年七月、後花園天皇即位とともに、前朝より勾当内侍(菅原茂子)と高倉(冷泉)永藤の娘新内侍(藤原藤子)が渡されることになった(『薩戒記』正長元・七二八)。普通は、彼女たちに加えて新しく内侍が任ぜられるはずであるが、天皇が幼いこともあり、『薩戒記』に「掌侍当時二人、茂子(勾当、從四位下)、藤子(從五位下)也、同皆去春被<sub>レ</sub>叙了、然而於<sub>二</sub>勾当内侍者為<sub>二</sub>女工所勾当之間、若猶可<sub>二</sub>加階<sub>一</sub>歟、同可<sub>二</sub>伺定<sub>一</sub>云々」とあるように(永享二・一二・二五)、しばらくこの二人体制であった可能性がある。またこの記事に見えるように茂子はこの年の春に從四位下に叙されている。そして永享五(一四三三)年正月三日、後花園天皇が元服し、さらに一〇月の後小松院崩御によって、院の女房のうち現勾当内侍の姪に当たる左衛門督局(東坊城長頼の娘、菅原孝子)と前勾当内侍(故典侍禪尼)のやはり姪に当たる右衛門督が内裏に内侍として参仕することになり、本来の内侍の体制にもどされることになったようである(『看聞』永享五・一二・二二)。この崩御に際しては、勾当内侍茂子、新内侍藤子ともに素服を賜っている(『看聞』永享五・一一・一〇など)。茂子が自身の姪である孝子に勾当の地位をいつ譲ったかを示す史

料は今のところ管見に入らないが、嘉吉二年四月の賀茂祭には典侍として女使を勤めているので（『師郷記』嘉吉二・四・一九）、これ以前であることは確かである。孝子の中内侍としての活動は、今のところ嘉吉元年三月が最後であるので（『看聞』嘉吉元・三・八）、これより後になる。もう少し時期が限定できるようである。勾当内侍は、伏見宮家が永享七年一二月に伏見から京都一条東洞院の引越してきた後、毎年正月の末に大納言典侍とともに宮家に年始の挨拶に訪れるのが恒例となっていることが『看聞』から知られる。<sup>(25)</sup>ところが嘉吉三年の際は、「大典侍・宰相典侍・勾当内侍・伊予参、勾当ハ初参也、仍進折紙」とあり（『看聞』嘉吉三・二・二九）、新旧の勾当内侍の宮家訪問に際し、勾当は初めて来たとわざわざ注記されていることからすると、日記は欠けているものの、前年の訪問の際には彼女は宮家を訪れていないようである。とすれば、勾当内侍が交替したのは、嘉吉二年の正月以後、前述のように典侍として参仕した四月の賀茂祭以前の三か月程の間ということになり、賀茂祭の典侍は準備のために三月には選ばれることが多いので、二月もしくは三月の間に補任されたといつてよいであろう。

茂子は宰相典侍と号し、以後長きにわたって典侍を勤め、度々賀茂祭にも参仕している。<sup>(26)</sup>そして、この項の最初に述べたように、康正元（一四五五）年一〇月七九歳で出家し、従三位に叙された。没

年は不明であるが、寛正三（一四六二）年に広橋綱光が「菅亜相亭」（東坊城益長、前権大納言）を訪れ、勾当内侍（孝子）とともに「三位局」を見舞っているが、この三位局は茂子と考えられるので、八〇歳半ばまでは存命していたのは確かである（『綱光公記』寛正三・五・一八）。

## 2 菅原孝子（後小松院左衛門督↓中内侍↓勾当内侍↓典侍）

東坊城長頼の娘であり、すでに前項で述べたように、称光天皇の応永二九年より叔母の茂子とともに後小松院の女房（左衛門督）として活動が確認される（『兼宣公記』応永二九・四・二三他）。彼女は、応永三二年の春日祭では、院の女房でありながら内侍の役を勤めており（『薩戒記』応永三二・一・一三）、すでにこの頃より内侍の地位への意欲が感じられる。

前述のように永享五年に内侍に補任し、中内侍と呼ばれていたが（『看聞』永享九・一・二三など）、前述のように嘉吉二年の二月もしくは三月頃に勾当内侍に任じたと考えられる。そのため、『建内記』嘉吉元年一二月二一日に見える勾当内侍は前勾当の茂子、同二年正月から三月までの日記は欠けており、次に四月一〇日に見える勾当内侍は孝子と比定しておく。嘉吉三年九月の禁闕の変では、「自門々凶徒乱入内裏」、先局町長橋辺付火之間」（『康富記』嘉吉三・九・

二三」とあるように、内裏に乱入した南朝の遺臣たちはまず長橋局に侵入し放火したようで、彼女も命からがら脱出したものと推測される。

孝子は、文正元(一四六六)年四月、典侍に任ぜられ、勾当内侍をそれ以前に辞した(『後法興院記』文正元・四・一九)。後土御門天皇の時代となっても彼女らしき典侍の活動は見えず、しばらくして出家したか亡くなったものと推測される<sup>29</sup>。

### 3 藤原藤子(新内侍↓藤内侍)

冷泉(高倉)永藤の娘で、称光天皇の応永三二(一四二五)年一月に内侍として入内し、新内侍とよばれ(『薩戒記』応永三二・一一・一二)、後花園践祚後もそのまま新内侍として参仕した(同前正長元・七・二八)。永享二(一四三〇)年の春には従五位下に叙されている(同前永享二・二・二五)。永享五年の後小松院の崩御に際しては、勾当内侍茂子と共に素服を賜っている(『師郷記』永享五・一一・六など)。

永享一〇年頃からは、藤内侍と呼ばれるようになったが(『看聞』永享一〇・二・一〇など)、文安四(一四四七)年四月、「藤内侍(故宰相入道〔冷泉〕永藤卿女、右兵衛督永豊卿妹、禁中不断祇候也)逝去、病氣不経幾日云々、不便ッ」とあるように病気で亡くなつて

しまった(『建内記』文安四・四・二七)。三七歳であつたという(『師郷記』同前)。

### 4 右衛門督

勾当内侍菅原茂子の姪孝子と共に、永享五年に院の女房から内侍として補任され(『看聞』永享五・二・二二)、そのまま右衛門内侍と呼ばれ参仕した。彼女は後小松院から称光天皇の時代にかけて勾当内侍を勤めていた藤原能子(典侍禪尼)の姪に当たる女性である(同前)。文安三元(一四四四)年には彼女が申請した「尾張国長田郷・播磨国福田保并勘解由小路烏丸敷地事」についての当知行安堵が認められている(『建内記』文安元・四・二三)。後花園讓位後は、院の女房に転じ、『親長卿記』文明三年正月二〇日条に見える「旧院女房」(後花園院は前年一二月に崩御)の一人「右衛門督局」は彼女であろう。その後の消息は管見に入らない。

### 5 新内侍(左衛門督↓左衛門内侍)

この内侍のことは、すでに前稿の後土御門天皇の内侍の項の3で述べたが、訂正すべき点もあるので、改めて整理しておく<sup>30</sup>。

次の史料<sup>⑨</sup>に見えるように、「去年十二月晦日」つまり文明三(一四七二)年一二月に内裏で、「新内侍〔菅宰相頭長息女〕と座

次相論を起こした女房は、「旧院女房〔旧院御在位之時、新内侍也、御脱履之後別当〕左衛門督局〔前菅大納言益長息女也〕」とあり、旧院（後花園）が在位中に新内侍と呼ばれ、讓位後、院において別当局もしくは左衛門督局とよばれていた女房である。

⑨「旧院女房〔旧院御在位之時、新内侍也、御脱履之後別当〕左衛門督局〔前菅大納言益長息女也〕、去年十二月晦日参内裏、与「新内侍」〔菅宰相顕長息女〕座次事及相論、兼日被注、新内侍者自元内裏祇候、左衛門督局〔可号左衛門内侍云々〕、為「旧院祇候之女房」、为「当参」之間、可為「下臈」云々、但旧院御脱履之始、一日節供、院女房参内裏、々々女房参院之時、臈次ハ先左衛門督、次新内侍也、为「是如何之由已及勅問」〔一条大閤〕、猶左衛門督内侍上首可叶「道裡」云々、仍为「上首分」也、随「思出」記之」

（『親長卿記』 文明四・二・八）

彼女は、東坊城（菅原）益長の娘とある。『尊卑分脈』には、益長の娘として後柏原天皇の勾当内侍であつた松子しか所載されていないが、どうももう一人いたらしい。

『親長卿記』の文正元（一四六六）年の日記には三月二日条以降、

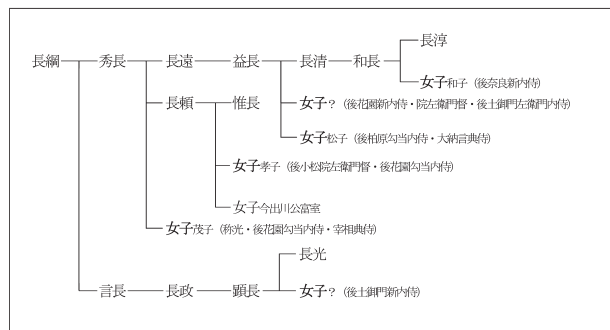
後花園院御所の左衛門督という女房の宛の書状がしばしば書き留められているが、これがこのもう一人の益長の娘であらう。

後土御門天皇の代の初めてのころ、内裏の内侍を補うためか、元内侍であつた左衛門督局が再び内侍として（左衛門内侍）出仕を請われ参内した際、新内侍として参仕していた菅原顕長の息女と席次の順をめぐってトラブルを生じたのである。結局、天皇は「一条大閤」つまり一条兼良に諮問さ

れ、左衛門内侍を上席としたという。これには東坊城家内部における嫡流・庶流の争いが反映しているのかもしれない。

この左衛門内侍は、この史料⑨以降は、その事績を確認しえていない。次にこの東坊城家から輩出した内侍たちの系図上の位置関係を整理して提示しておく。

系図1 東坊城家系図

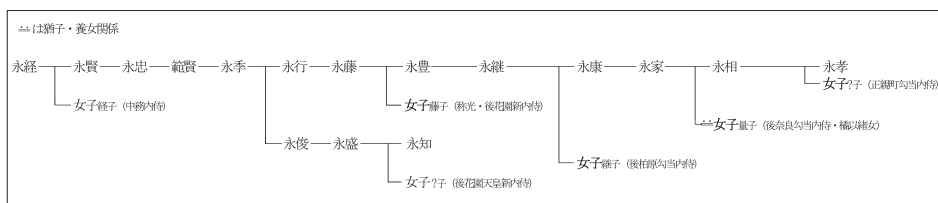




## 6 新内侍

永享一三(一四四二)年正月一〇日、「故永盛卿息女」である新内侍は、將軍義教が酌をした酒を飲まなかったので、「向後不可参」と命じられ、内裏も退出ということになったが、義教から内裏まで退出するのは「不可然」という申し出があり、戻ったという<sup>33)</sup>。その後、新内侍としての活動が確認され(『看聞』嘉吉三・一〇・二六など)、文安四(一四四七)年に高倉永知が一八歳で亡くなった際、「姉者内侍也、依去年喪母、未参三局辺云々」と記された内侍はこの女性であろう(『建内記』文安四・七・一二)。文安六年の春日祭に参仕した新内侍もこの高倉永盛の娘と考えてよいと思うが(『康富記』文安六・二・二二)、その後の消息は管見に入らない。次の系図2に示されるように、この高倉家も多く勾当内侍を輩出した家である<sup>34)</sup>。

系図2 高倉(冷泉)家系図



## 7 藤原春子(小内侍→右衛門内侍)

前稿の後土御門天皇の内侍の項に掲示した、四辻季保が高倉家から迎えた養女春子のこと。詳細は前稿参照。彼女は、文安四年の『建内記』に「小内侍」と見え、長祿四(一四六〇)年頃に右衛門内侍と称していた。

## 第四章 命婦他

### 1 和氣郷子(伊与局)

前稿で、後土御門天皇時代から残る『御湯殿上日記』において、典侍・内侍とともにその女房名を時に「いよ殿」<sup>35)</sup>と敬称を付されて明記され、鞍馬や清荒神に交替で天皇の代参を行うメンバーにも含まれている、伊与という名の女房の存在を指摘しておいた。彼女は少なくとも前稿において対象とした後土御門→後奈良の三代の天皇の間連続して登場する。当然その期間一人ではなく、家子・就子二人の和氣氏の女性たち(ただし後述するように実子ではない)が交替して参仕していた。このように典侍や内侍と共に禁裏女房の幹部的なポストを構成し、また宮廷の医道を世襲する和氣氏の一流の女性たちが代々占めていた伊与局という存在はいづごろから形成されたのだろうか。少し前の時代までさかのぼって検討してみよう。

表3 歴代の伊与局

	氏 名	女房名・職	関係史料	備考
1	源澄子	伊与（命婦） ＊後光厳天皇	『師守記』貞治 3(1364),8,2「〔折紙〕賜素服輩／…／命婦／康子 源澄子・8,4「命婦〔右衛門佐・〔不参〕伊与〕」	光厳院崩御（貞治 3,7,7）による素服を賜った女房の一人。
2	和氣成子 （和氣広成女）	伊与（命婦） ＊後小松天皇  坊門局（義満・義持） ＊室町殿	『後愚昧記』永徳 2(1382),4,19「台盤所簡人数／…／命婦／〔広成朝臣女〕和氣成子 〔篤直卿女〕丹波典子／藏人／鴨言子 紀宗子」 『兼宣公記』明徳 2(1391), 7,12（和氣広成重病）  『看聞』応永 32,1,25「坊門局〔室町殿祇候、寿藏主親昵〕、旧冬月追他界之間、焼香罷向之間…」 『薩戒記』応永 33,5,6「故広成朝臣女〔号坊門局、候入道内相府、本是内裏女房伊与局也、故鹿苑院殿之御時渡参彼御方、去々年死去也〕」	即位（4,11）に際しての台盤所簡人数  内裏女房から義満の女房へ 応永 31(1424)年末に死去。
3	和氣？（持明院基親女→和氣郷成猶子→裏辻実秀猶子）	今参（別当） ＊称光天皇	『薩戒記』応永 33,4,26「内裏女房今参局〔典業頭和氣郷成朝臣女也、為台所別当、実者故正三位基親卿末女云々、近日主上御寵異他〕懷妊、既及五个月、…又彼女房可為権大納言〔実秀〕猶子之由有勅定云々」 『薩戒記』応永 33,8,22「最初号伊予局〔下臈也〕」 『満濟准后記』応永 33, 10,21「内裏別当局今日御産、皇女云々、御産所裏辻大納言亭、則彼卿為猶子云々、初ハ典業郷成朝臣以猶子之義為台所別当、懷妊以後、為仙洞御計被成裏辻猶子云々」	懷妊  典侍となすべきとの意見 皇女出産
4	和氣郷子→藤原信子（藤原孝長女→和氣郷成猶子→大炊御門信宗猶子）	伊与（命婦） ＊後花園天皇  伊与（台所別当） ＊後花園天皇  伊与（別当） ＊後花園天皇  東洞院殿 ＊後花園～後土御門天皇  二位局 ＊後土御門天皇  准后 ＊後土御門天皇  嘉楽門院 ＊後土御門天皇	『師郷記』永享 5,11,6「素服、公卿、…／女房、権大納言局・勾当内侍・新内侍・伊与・今参等也」・『看聞』11,10「〔御素服人数〕女房／典侍有子・〔勾当〕掌侍茂子・藤子・命婦郷子・藏人広子」  『看聞』永享 6,7,19「御乳人晩景参、勾当内侍御使而参、内裏宮伊予局〔台所別当、郷成朝臣猶子〕懷妊」 『満濟』永享 6,10,30「去廿八日内裏祇候女房産無為、姫宮降誕云々」  『建内記』嘉吉 2,4,8「保成朝臣云、禁裏伊予局懷妊、御産所事可存知之由、被仰下之間、計会云々、伊予局者故郷成卿猶子也、仍保成連枝之分也」 『管見記』嘉吉 2,5,25「孝長朝臣告来曰、今朝伊与局平産、皇子誕生云々、珍重々々、承悦無極、彼女房孝長息女云々、但不知其実、莫言々々」  文安 5,『康富』7,20「禁裏別当局〔伊与殿〕」  『宣胤卿記』文明 13,7,26「新院御代被下号伊与、御在所正親町東洞院〔内々此間号東洞院殿〕、自去年御新造也、内裏之北也〕院号定也」 『親長卿記』文明 3,閏 8,6「東洞院殿〔世人称如此、非女院号、二位殿御事、今上御母〕」  『後法興記』文正 1,4,19「從二位藤原信子」 『親長卿記』文明 3,1,15「二位局〔今上御母、実故孝長朝臣子、故郷成三位令猶子進禁裏、後文徳院御在位初也、後故大炊御門前内府入道猶子〕今日於御寺有出家、黒衣方沙汰也」  同前文明 3,閏 8,10「今夜有宣下事、二位殿〔当今御母〕准后、梶井殿〔伏見殿宮〕法親王宣下也」  『宣胤卿記』文明 13,7,26〔史料㊹〕 『後法興記』長享 2,4,28「〔嘉楽門院〕女院酉刻終遂以御事切云々、春秋〔七十八〕自兼日諒闇事被議定云々、今日則被送申伏見御山莊、来月三日御葬云々」	後小松院崩御（10,20）による素服を賜った女房の一人。  懷妊 皇女出産  懷妊 皇子出産（後の後土御門天皇）    從二位に叙される。 出家  准后宣下  院号宣下 崩御
5	和氣家子	伊与（命婦） ＊後土御門天皇	『後法興記』文正 1,4,19「和氣家子〔命婦〕」 『実隆公記』長享 2,5,15「素服人数／…／女房／大納言典侍／勾当内侍／伊予〔命婦也、故女院撫育之人也〕」	嘉楽門院崩御後、素服を賜った女房の一人。

南北朝期の終わりから室町期にかけて、表3に示したように五人の伊与局を確認している。そのうち四人が和氣氏、もしくはその猶子として出仕した女性である。表3の1源澄子と2の和氣成子との間にもう一人くらい別な伊与局のいた可能性があるが今のところ確認していない。

表3の1・2・4・5の四人について掲示した関係史料からも知られるように、この伊与局は前代からの女房の種類でいえば命婦とよばれる女房で、鎌倉時代、順徳天皇によって作成された『禁秘抄』には「中臈」の項に「是昔号<sup>二</sup>命婦<sup>一</sup>、侍臣女已下也、諸大夫良家子、医陰陽道等猶号<sup>二</sup>中臈<sup>一</sup>、八幡別当女同、凡一切者多中臈品也」とあり、ランク的には内侍（掌侍）と同じであるが、日常的に貴族らに接して天皇との取り次ぎを行ない、節会などの儀式や朝廷に関わる諸社の祭などにも所役を持つ内侍よりは下に位置付けられていたようである。そのためか、儀式作法などに知識を必要とし、そのための特定の教育が要求される内侍などに対して、天皇の近侍が可能でありながら、それ程実務能力を必要とせず、より広範囲に募集することのできるポストではなかったのだろうか。『禁秘抄』に見えるように、すでに早くから医道・陰陽道など天皇の日常の健康管理に関わる専門の家の女性たちが送り込まれていたが、この時代には、侍医や陰陽師たちを通じて、家柄や身分に枠がある典侍や内侍より、より広

範囲の階層の女性を送り込むルートとして利用されていたように考えられる。

当該期において和氣氏出身の最初の伊与局は広成の娘であるが、表3に「故鹿苑院殿之御時渡<sup>二</sup>参彼御方<sup>一</sup>」と見えるように、彼女は恐らく義満の目にとまり、室町殿の女房となり坊門局とよばれて一生を終えた。義満以下、頻繁に内裏や院の御所に出かけ、その女房たちと関係を持つことも多かったようであるが、そういう場で貴顕と接することのできる地位の女房であつたことが知られる。

和氣氏の伊与局で次に現れるのが、表3の3の女性であり、台所別当に任じられている女性である。<sup>(37)</sup> 彼女はもともと持明院基親という公卿の娘であるが、逆に身分が高かったため、和氣郷成の猶子という形で入れられたのであろうか。「近日主上御寵異<sup>二</sup>他<sup>一</sup>」と見えるように称光天皇の寵愛を受け、懷妊して皇女を産んだが、むしろ和氣郷成が天皇に気に入られるような女性を探して参内させていたというのが実状なのかもしれない。さらに天皇の子を懷妊したため、その家のランクを上げるために上級貴族で当時権大納言の裏辻実秀の猶子とされた。<sup>(38)</sup> 表3の彼女の項に載せた『薩戒記』に「最初号<sup>二</sup>伊予局<sup>一</sup>（下臈也）」とあるように、公卿たちから見ればこの段階の伊与局は「下臈」の女房であり、天皇の皇子女を産む女性の地位としてはそぐわないと認識されていたのである。

後花園天皇の時代の伊与局は、表3の4に提示した最初の名和氣郷子である女性である。すでに大納言典侍藤原綱子のところで触れたが、地下の楽人藤原孝長の娘を和氣郷成の猶子として入内させた女性であり、永享五（一四三三）年一〇月に崩御した後小松院の素服を賜った女房の一人として現れるのが史料的な初見である。長享二（一四八八）年に七八歳で亡くなっている（『後法興院記』長享二・四・二八）、この時二三歳で、翌年に後花園の皇女を産んだ時、彼女は二四歳、応永二六（一四一九）年生まれの天皇は一五歳であった。

この皇女は伏見宮家で養育されることになり、永享六年一二月に宮家に迎えられ（『看聞』永享六・二・二五）、以後、「内裏姫宮」として宮家に迎えられ、貞成の子女らと一緒に育てられ、後に尼門跡の安禪寺に入室することになった（『看聞』嘉吉元・四・二八、『建内記』同・五・七）。

嘉吉二（一四四二）年に誕生した皇子（後の成仁王）も伏見宮家で養育されることになり、翌三年九月の禁闕の変に際しては、宮家の女房二条が抱きかかえて他の宮たちとともに御所から宮家近臣の慈光寺持経の亭に避難した（『看聞』嘉吉三・九・二三）。この年の一二月二一日には宮家で髪置の儀が行われており、そこで「只宮にて被<sub>二</sub>養申<sub>一</sub>」とあるように、まだ普通の皇子の一人として養育されていたことが知られる。後花園天皇はまだ二〇代前半であるから、当然別な家柄のよい女房に皇子が誕生することが期待されていたからであろう。

後花園天皇時代の彼女の消息は、文安五（一四四八）年あたりまでは追うことができ、『康富記』には「禁裏別当局（伊与殿）」と表記され（表3参照）、別当局もしくは伊与局と呼ばれており、康富が和氣保家（郷成子）と会った際にも「別当局伊与殿者彼朝臣妹之故也」と記し（『康富記』文安四・二・二一）、その頃までは彼女の身分に別段の変化は見られないようである。

⑩「今日当今母儀准后（信子〔元郷子、改名也〕、実父故藤原孝長朝臣也、故和氣郷成朝臣為<sub>二</sub>猶子<sub>一</sub>」、其後保家朝臣猶子、後又故大炊御門入道前内大臣〔信宗公、去年正月廿六日贈太政大臣、十三回云々、没後称号可<sub>二</sub>尋記<sub>一</sub>〕為<sub>二</sub>猶子<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>当今母儀<sub>一</sub>也、先年御出家、御尼鉢也、御歳七十一歳、新院御代被<sub>二</sub>下号<sub>一</sub>伊与、御在所正親町東洞院〔内々此間号<sub>二</sub>東洞院殿<sub>一</sub>〕、自<sub>二</sub>去年<sub>一</sub>御新造也、内裏之北也〕院号定也」

（『宣胤卿記』文明一三・七・二六）

彼女は、この史料⑩に見えるように、後に大臣家の大炊御門信宗

の猶子とされ、藤原信子と改名したことが知られる(表3の文明三年の出家の記事にも見えている)。恐らく彼女の産んだ皇子(成仁)が皇位を継承することになったためと推測される。その時期ははっきりしないが、文正元(一四六六)年に彼女が従二位に叙せられた際、「藤原信子」という名で叙されているからこれ以前であることは確かである(『後法興院記』文正元・四・一九)。成仁は、長祿元(一四五七)年一月十九日親王宣下がなされ、翌年四月一七日には内裏で元服の儀が行われ(『統史愚抄』)、立太子の儀は行われなかったが、皇儲であることが公的に示された。大炊御門信宗の猶子となったのはこの前後ではないかと思われる。

史料⑩に「新院御代」つまり後花園天皇の在位中に伊与と号したが、その邸宅とされた場所「正親町東洞院」に因み、内々「東洞院殿」と呼ばれていたことが知られる。この邸宅は、当時内裏があった一条東洞院殿(旧伏見宮御所)の近くにあり、康正二年に再建された土御門内裏(土御門東洞院)の北側に立地している。

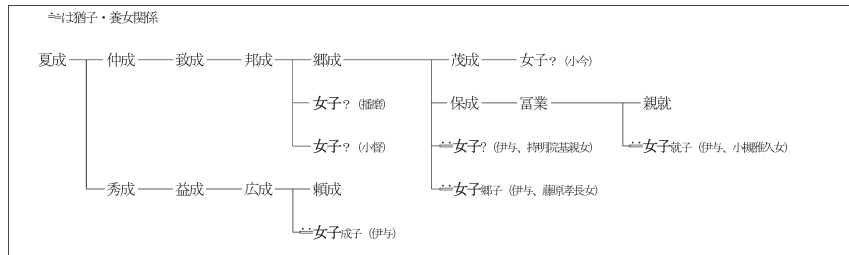
彼女は、後土御門天皇の代になると、天皇の生母として厚く遇され、文明三(一四七二)年正月に出家するが、その年の八月に准三后を宣下され、さらに史料⑩にみえるように文明一三年には女院となつて嘉楽門院と号し、長享二(一四八八)年四月に崩御した。下級官人の娘で一命婦として入内しながら、天皇の生母として女院に

まで駆け上った訳であり、当時としては稀に見るサクセスストーリーとして人口に膾炙したに違いない。そして彼女が長らく伊与局にあつたことばかりでなく、表3の5にあげた次の伊与局である和氣家子が「故女院撫育之人」とあるように、この嘉楽門院に養育された女性(系譜不明)であつたことは、この女房のポストにある種の権威を与え、ランクを上昇させたのではないだろうか。和氣氏出身の女房たちの系譜を示すと系図3のようになるようである。

## 2 賀茂?(今参、後の播磨局?)

永享七年頃に内裏に、「今参」として「賀茂社務娘」で賀茂富久の妹が「御下」の女房として参仕し始めている。<sup>(40)</sup>この女房は、内裏の「御代官」として上臈・御乳人とともに賀茂社に参詣したり(『看聞』永享

系図3 和氣氏系図



一〇・三・一九)、「上臈・大納言典侍・宰相典侍・勾当内侍・御今参」とあるように上級の女房たちと共に伊勢に参宮したりしており(同前嘉吉三・四・一二)、単なる下級の女房とは思えない。

『看聞日記』では、前述のように伊与局の産んだ皇子を預かって養育しているため、その皇子に関して何か祝い事を催す場合には、内裏女房たちを大勢招待したり、女房たちから挨拶に訪れたりすることがあるが、その際、例えば「内裏上臈・新典侍・〔広橋〕め、典侍・宰相典侍・勾当内侍・伊与・〔賀茂〕今参等参、有<sub>二</sub>一献<sub>一</sub>、得選・女官・女婦等皆参」(同前文安四・一一・二八)のように、この賀茂氏出身の今参は女房名が記され、その他大勢の下級女房たちとは区別されて、上級女房たちの末席に連なっている。彼女は、『看聞日記』が切れた後、関係史料が乏しく、「今参」という名前が取れてどのような女房名を与えられて活動したのかは不明であるが、あえて推測してみるならば、伊与局と同様に後土御門〜後奈良天皇期に内裏の中心的な女房の一人となる播磨局となるのではないかと思われる。

前述、元伊与局藤原信子が従二位に叙された叙位の際に、従五位上に叙された「和気家子〔命婦〕賀茂尚子〔蔵人〕」のうちの賀茂尚子がこの今参ではないかと考えている(『後法興院記』文正元・四・一九)。後土御門天皇代の播磨局は、その出自を語る史料はほとん

どないが、『実隆公記』に「賀茂康久息女五才〔播磨局相統也〕」(明応七八・二〇)と見えるように、後任に賀茂氏の女子を内裏に迎えており、自身も賀茂氏の出であった可能性が高いと思われる。

### 3 御乳人

すでに別稿<sup>④</sup>で触れたように、正長元年に伏見宮貞成親王の皇子彦仁が後花園天皇として践祚するまで、この彦仁や貞成の第一皇女(あここ、後の入江殿性恵)の乳母だった女性であり、宮家の女官で賀々と呼ばれていた。践祚にあたって宮家から迎え入れられた際、「上臈女房一人・御乳母一人」が付けられたが(『薩戒記』正長元・七・一三)、その「御乳母」が彼女であったと考えられる。彼女は、宮家の近臣庭田重有の妾で、内裏に参仕する以前にすでに七〜八人、子供を産んでおり、さらに内裏に参仕してからも子を産んでいるが(『看聞』永享三・九・二五)、出自は不明である。文安四年までは活動が迫るが(『看聞』文安四・一一・二二)、その後は不明である。

内裏と伏見宮家を兼参し、貞成にとつては、子息である後花園天皇の様子を知るためばかりでなく、内裏・院御所・室町殿などの様々な情報得るための大事な情報源であった。天皇が大きくなると、プライベートな連絡や物品の進上・下賜を担うばかりでなく、宮家の蔵書などを天皇の求めに応じて進覧する際の運び手ともなった。



永享六年頃には、その活動の主体は内裏の方に比重が大きくなりつつあったらしく、永享五年段階では、内裏内に局を持たず、大納言典侍の局に間借りする形で勤めていたが（『看聞』永享五・一・二三）、永享九年には、里下りするために内裏近くの「一条辺家」を内裏の助成で買い求めて移住している（同前永享九・二・六、三・四）。これは、永享七年一二月に宮家が伏見より京都一条東洞院に移ってきたことにより、両方への参仕に便利ないように落ち着き場所を設けたのであろう。

おわりに

まだまだ不十分な点が多いが、今回後花園天皇時代の禁裏女房の復元を行った結果、前稿で提示した後土御門天皇時代の女房の在任一覧図（前稿表3）と不整合な点が判明し、それを修正したものが次の表4である。

女房名については、藤原顥子のように氏十名を原則とし、○を

表4 後土御門天皇時代の女房

職名	女房名	寛正5	寛正6	文正1	応仁1	応仁2	文明1	文明2	文明3
上臈	藤原?（正親町季女）	○ 上臈	○	○	○	○	○	○	○
	藤原?（花山院時忠女）	×	×	×	×	×	×	×	△ 東御方
	藤原冬子（三条実尚女）	?	?	?	?	?	?	?	○ 旧院上臈
	藤原?（大炊御門信量女）	×	×	×	×	×	×	×	×
典侍	藤原顥子（日野家秀女・広橋綱頼子）	○	○	○	○	○	○	○	○ 大納言
	源朝子（延田重賢女）	×	×	×	×	×	×	×	△ 近衛局
	藤原命子（万里小路冬房女）	○ 新典侍	○	○	○	○	○	○	○
	藤原房子（勧修寺教秀女）	×	×	×	×	×	×	×	×
	藤原守子（広橋綱光女）	×	×	×	×	×	×	×	×
	藤原春子（四辻季保養女）	○ 勾当	○	○	○	○	○	○	○
内侍	藤原脩子	?	?	○ 卿	×	×	×	×	×
	菅原?（東坊城頼長女）	×	×	○ 新内侍	○	○	○	○	○
	菅原?（東坊城益長女）	△	△	○ 左衛門	?	×	×	×	×
	菅原松子（東坊城益長女）	×	×	×	×	×	×	×	×
	藤原夏子	×	×	×	×	×	×	×	×
	藤原頼子（高倉永継養女）	×	×	×	×	×	×	×	×
命婦他	播磨（賀茂?）	×	×	×	×	×	×	×	×
	伊与（和女家子）	?	?	?	?	?	?	?	?
	御ちの人（乳母）	?	?	?	?	?	?	?	?
	女房数	5 (9)	5 (9)	7 (10)	5 (9)	5 (8)	5 (8)	5 (8)	8 (10)

付して、そこで父の名十女を示し、所属する家がわかるようにした。播磨局と伊与局は女房名に○を付けて氏名を記した。

大きな変更は、内侍に「菅原?（東坊城益長女）」を加えたことである。

また人数について、表1の最下段に提示したように、最多で一三人、最少で四人と差があるが、これは史料的な問題であろう。試みに?印を数えた分も加算してみると、大体一一～一三人というのが、

ノーマルな状態での女房の定員かと考えられる。表1の後花園天皇践祚より永享四年まで、表4では後土御門天皇践祚より文明二年あたりまではやや少なめなのは、院の御所（仙洞）が併存していることが影響しているのかもしれない。もう少し分析が必要であるが、内裏の女房も院の管理下であり、仙洞の女房が内裏の女房の機能を補えるために少な目でもよいのではないかと想定される。永享五年の後小松院、文明二年の後花園院の崩御は内裏の女房についても機能強化を必要としたと考えてもよいのかもしれない。

## 【注】

- (1) 拙稿「戦国時代禁裏女房の基礎的研究―後土御門・後奈良天皇期の内裏女房一覧―」（『愛知学院大学文学部紀要』四四、二〇一五）。以下、前稿という場合はこの論考を指す。
- (2) 拙稿「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要・人間文化』二八、二〇一三）。
- (3) 坂本和久「室町時代の公武の密通について―『看聞日記』を中心に―」（『福岡大学大学院論集』四三―一、二〇一一）。
- (4) 『康富記』文安五・五・一二に「内裏上臈御局（裏松（辻）中納言妹）今日逝去、虚勞之違例云々、御年三十二云々」、『師郷記』同日条では「三十三云々」とあり、「此両三年連々違例云々」とする。
- (5) 『看聞』応永二六・八・二二に見える上臈は、この上臈の先任にあ

たる女性であろうか。

- (6) 吉野芳恵「室町時代の禁裏の上臈―三条冬子の生涯と職の相伝性について―」（『国学院雑誌』八五―二、一九八四）。
- (7) 彼女は、『看聞』によれば、木寺宮と密通事件を起こし、さらに足利義持とも関係があったと噂されている（応永二五・一〇・二〇）。
- (8) この後円融の代には、正親町三条家の実音の娘も上臈となっていた可能性がある（『後愚昧記』永和二・八・三、八・二六）。実音も正親町三条家のお出で、やはり彼の姉妹は光厳院の妃となり、崇光・後光厳両天皇を産み、女院号を宣下されている（『陽禄門院』）。
- (9) 『綱光公記』寛正五・七・一四に「入夜典侍殿有御出」と見えるのは綱子と考えられる。
- (10) 応永二三年、内裏に小番が編成され、公家たちが輪番で内裏に詰めることになったが、これは称光天皇が「武勇有御好、太刀・刀・弓箭等翫御、背時宜者近臣・官女・下賤輩までも、以金鞭有御打擲、以弓被遊之」という有様で、その「御形儀」が人々の噂になり始めたので、義持からの進言を受けた後小松院は、広橋兼宣・日野豊光・同有光を遣わして諫めたが、天皇が聞き入れないため、義持が天皇を「可奉守護之由」を命じて設けた制度であった（『看聞』応永二三・六・一九）。当然のごとく、「守護」といっても実際は監視が目的であったことは言うまでもない。
- (11) 『看聞』応永二五・九・六、一〇・二。例えば『看聞』応永二八・一〇・二に「持経事、主上御酔氣之間以外御切諫、いさかひ申て逐電云々、侍臣いさかひ冠被打落事ハ虚説也、三位出京、実説語之」と見えていることなど。
- (12) 南朝の小倉宮が出奔している（『満濟准后記』正長元・七・八）。

- (13) 『看聞』永享六・二・九、二・一四、二・一六。
- (14) 『看聞』永享六・六・九、六・一二。
- (15) 『管見記』嘉吉二・五・二五。後にそれは事実として公表されたい(『親長卿記』文明三・一・一五、『宣胤卿記』文明一三・七・二六など)。
- (16) 『建内記』の記主万里小路時房がこの点を指摘したのは、後光厳院流天皇家の伝統を強調しようとする意図が感じられ、後花園天皇を崇光院流に位置付けようという伏見宮家の貞成に対するものであったのではないだろうか。
- (17) 『看聞』永享九・四・一四、同一〇・二・一〇など。嘉吉元年四月の賀茂祭には資親の沙汰によって女使に立っている(『建内記』四・一六、『師郷記』四・一九)。
- (18) 『看聞』永享三・四・一五、『薩戒記』永享六・四・一四、『薩戒記目録』永享九・三・一七など。
- (19) 以上『公卿補任』『弁官補任』『建内記』等による。
- (20) 『看聞』永享八・一〇・一五、一〇・一七、一〇・二五、一〇・二九、『経覚私要抄』同八・一一・八など。
- (21) 前稿(注(一))の典侍の項に所載した広橋顯子を参照。
- (22) 永徳二(一三八二)年四月後小松天皇即位とともに、勾当内侍の地位に就いたのは藤原蔭子で、高倉範蔭の次女であり(『後愚昧記』永徳二・四・一九)、後円融天皇の勾当内侍からその讓位後典侍となつて民部卿と号した女性の姪であるという。しかし、彼女は、就任直後に内裏を突如出奔し、騒ぎとなり足利義満まで参内して搜索の結果、内裏に隣接する長講堂の板敷の下にいたところを発見されるという事件を起こしている(『後愚昧記』永徳二・八・二五)。その後彼女が更迭されたという記事も見当たらず、代始めのことであり、また彼女が吉野氏の論文で勾当内侍に比定された高倉能子であれば、氏が指摘するように義満の寵愛を受けていたこともあり、この件は不問に付されたであろう。以後、応永元年より一六年あたりまで活動の記事が見える勾当内侍は、一応この高倉範蔭の娘としておく。恐らく応永一九年、後小松讓位後も勾当内侍の地位にあり、応永二七年三月一六日に勾当内侍を辞して典侍となり、同日に出家して典侍禪尼と呼ばれるようになったと考えられる(『看聞』)。
- (23) 『看聞』応永二四・四・五、同二六・一〇・二五など。
- (24) 『看聞』応永三一・一一・一六によれば、能子の姪にあたるといふ。
- (25) 『看聞』永享八・一・二六、同九・一・二六、同一〇・一・二三、それに同一三・一・二九。永享一年と二年は日記が欠けて不明であるが、同様と思われる。
- (26) 『康富記』文安元・四・一八、『師郷記』同三・四・二四、宝徳元・四・二三。
- (27) 長頼は応永二三・正・二二以前に亡くなつており(『看聞』、早くから叔母茂子のもとで養育されていたと推測される)。
- (28) 『晴富宿禰記』文明一〇・九・一七に見える「前長階」はこの孝子の可能性がある。ならば文明一〇(一四七八)年頃までは存命であつたことになる。
- (29) 院の女房としての活動は、『看聞』応永二七・三・一四、同三一・一二・二六、『兼宣公記』応永三一・一一・二〇などに見える。
- (30) 前稿で「菅原孝子」として掲示しているが、これも「菅原?」とすべきである。
- (31) 松子が内裏に参仕したのは、文明八年のことであり(『実隆公記』

文明八・一・七)、この女性とは別人と考えられる。

(32) 他に『親長卿記』文明二・一〇・二四、同三・一・三など。また院の崩御に際して素服を与えられている(同文明三・二・二七。)

(33) 『看聞』永享一三・一・一三、一・一五。

(34) 注(22)で触れた高倉範蔭の娘蔭子(後小松天皇の勾当内侍?)、そしてその伯母で後円融天皇の代の勾当内侍(春子)は、今のところ系譜が不明なためこの系図には所載していない。

(35) 『建内記』文安四・一・一四、四・二〇、四・二三。

(36) 『御湯殿上日記』文明九・四・四、明応九・一二・一一、享祿三・一・四など。

(37) 台所別当は、伊与局に固定されていた訳でないことは、後小松天皇の時期の台所別当が播磨局を称した女房が任じられていた(『教言卿記』応永一四・九・九、『応永年中樂方記』応永一五・八・二四)。彼女もやはり和氣氏の女性で、邦成の娘、郷成の姉妹にあたる女性であつた(『吉田家日次記』応永八・四・一一)。

(38) 彼女の実家である持明院家に戻されてもよさそうな感じがするが、彼女の実父の基親はすでに応永二六年に薨じており(『公卿補任』)、その家もすでに参議以上に任官できない非参議どまりの家に低下していたことが原因なのであろう。

(39) 伏見宮に出入りしていた和氣茂成(田村航「貞成親王と和氣茂成―伏見宮の連歌会から―」『芸能史研究』二〇五、二〇一四)であるが、内裏伊予局については、兄弟の保成の方が、応対することが多い。伊予局の管理は、嫡流の権限下にあつたためであろうか。

(40) 『看聞』永享七・一〇・二三、同八・一二・六。

(41) 拙稿「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」(『愛知学

院大学人間文化研究所紀要・人間文化』二八、二〇一三)

(42) 『看聞』永享六・六・二八に「御乳人參、自去月内裏祇候不得寸暇之間、久不參云々」とか、八・一九に「御乳人參、於于今内裏不断祇候、客人也、珍敷雑談」とある。